

地域包括ケアシステムの核を作る取り組み

一般財団法人ひふみ会 ヨリドコ小野路宿 古賀 寛

はじめに

日本が、そして私たちが暮らし働く町田という地域社会が迎える超高齢化社会においては、既存の社会インフラや社会保障制度の仕組みだけでは限界を迎えるであろうと予測し、これからの社会で必要なことは「地域において人々の暮らし方や生き方を提案し助け合っていける仕組み作りである」と考え、健康的で安心して暮らせる地域作りに取り組む活動の経過を報告する。

目的

一般財団法人ひふみ会（まちだ丘の上病院、一二三学園）は町田市小野路町の丘の上で40余年にわたり障害者支援と高齢者医療を担ってきた医療機関であるが、「病院に訪れる人々を支援するだけではなく、病院として人々がより健康的に暮らせる地域を作っていこう！」と、元気な人がどんどん集まりネットワークを広げ、その中に医療や介護が自然と溶け込んでいるような地域作りを目的に、2021年3月宿場町の面影を残す小野路宿通りに、集会所、カフェ、ガーデン、裏山、訪問看護ステーションを有した複合施設ヨリドコ小野路宿（以下、ヨリドコ）を開設した。

活動報告

病院が主となって設置した複合施設ではあるが、「医療っぽさは目指さない、訪れた人々の心身が元気になる場を作っていく」ための3つのビジョン「人とつながる場」「力を生かす仕組み」「学びを育む環境」を掲げ、地域住民が主体的に活動しながら医療者と

つながっていくコミュニティ作りに取り組んだ。

手法として、市民活動団体やアーティスト等の拠点として施設を開放し、竹林整備や竹細工、音楽祭、アート展、ハンドメイドマルシェ、学童クラブおよび放課後造形教室といった児童の居場所活動等の会場として活用したり町内会や近隣農家等との関係性も築いていき、多くの人の交流の場とした。また、健康的なランチを提供するキッチンとまりぎでは金曜日をコミュニティカフェとし、夜間はご近所居酒屋（夜のとまりぎ）を開催。そして、高齢者の体操サークルや歩く会、医療、介護の相談などの地域保健活動も広げ、あまねく年代の人々を対象とした。これらの活動については、場所を貸し出すだけではなく当法人職員（ケアマネ、看護師、療法士、医師等）が地域住民の一人として活動の輪に入り共に考え共に行動することでコミュニティに自然と医療職が溶け込んでいく環境を作った。また、各利用者の主体性を引き出すために細かい規則等は設けず共に活動しながら利用ルールを作っていた。

[コミュニティ活動の効果の例を以下に挙げる。]

メンタル面の不調から休職し精神科デイケアに通っていた方々に対し自由な活動場所として提供することで、新たな活動や仲間との出会いや竹林整備活動などによるマインドフルネスの高まりから無事に社会復帰し、以後も活動を継続することで深刻な再発を防ぐことができた。

コロナ禍の行動制限が続く中、「竹林の中でコンサートを開こう！」と有志によりプロ奏者を招いた篠笛コンサートを実施した。閉塞感のある日常において竹林で展開された幻想的な非日常的体験で築かれ

た絆は現在でも継続し、20名ほどの実行委員会組織に拡大され定期開催を続けている。

ヨリドコを中心としたコミュニティの関係人口は日々増加しているが、その中でも特にヨリドコを拠点として自身の活動を展開する方々については、職員が不在の時間帯であっても来訪者にコミュニティや地域保健活動について自発的に説明し、必要時は職員に繋いでくれるリンクワーカーとして活躍してくれている。

[地域保健活動の効果の例を以下に挙げる。]

高齢の体操サークルメンバーが要介護認定された際、ヨリドコのケアマネジャーが担当することにより、認知症状やメンタル不調が原因でサークルに通えなくなっても担当が自宅まで迎えに行きコミュニティに引き戻すことが容易にできた。

ご近所の顔見知りの独居高齢者の要支援認定を受けヨリドコのケアマネジャーが担当した際、必要な医療が未充足であることに気づき、訪問診療につなげることで治療が継続出来、また体調不良時に連絡をくれたことから疾病の早期発見が出来、症状の悪化（入院や介護状態）を防ぐことができた。

訪問看護リハビリにより車椅子で外出できるようになった利用者が「お酒を呑みに行きたい」と言い出したので、夜のとまりぎへ招待すると生き活きとしていき旧友が集う会に発展した。この活動が続くにつれ、看護師と医師の訪問回数が減った（医療及び介護の必要度が低下した）。

利用者概要については下表資料1に記す。

資料1 ヨリドコ小野路宿を活用する団体

・町田市小野路町町内会・町田市高齢者支援センター・サンサン体操クラブ・ゆっくり歩く会・グリーンケアこもればの会・小野路里山活用プロジェクト実行委員会(小野路竹俱樂部,小野路シルク工房,東京ビーフ食育プログラム,蓄音機を聴く会,小野路農さんば,小野路小町,竹楽祭,ゼルビアホームタウン活動)・竹林篠笛コンサート実行委員会・ヨリドコてしごとマルシェ・萩生田牧場・竹あそびけたた・ひじり自然塾・Donqhand・Soi-meme・ムクムクエノキアートクラブ・まっちょひつじファンクラブ・あした農場・笑桃-emo-・不登校児支援ユメカナエ・Ramitacoffee
・なっちゃんのお菓子屋さん 他多数

年間利用者数 2024年度 9,024人

年間催事数 2024年度 292回

ご近所割合 徒歩400m圏の200世帯中30数世帯が日常的に利用

地域に関わる職員 医師2,看護師14,療法士6,ケアマネ3,他数名

考察

コミュニティとは、共通の目的,興味,地域などによって結びついた人々の集まりのこと指すが、場所があつてこそ人が集まり、人が集まってこそ新しい活動が生まれるものである。ヨリドコではそれらを支える施設とビジョンを有しており、地域住民と同じ目線で活動することで医療者と利用者というような壁がなくなり、医療職者が身近な存在として浸透していつているのだと考えられる。この効果としては、平穏な日常では地域の知り合いとして過ごす、自身や家族などに心身上の困りごとが生じた際にまずは気軽に相談できる医療職者として機能し、そこから必要な医療や介護、行政手続き等の専門業務にシームレスに発展することができるため、利用者にとっては心強く安心できる環境となる。また、医療職者にとっても地域の知り合いに生じた困りごとであるため、たらい回しなどせず真摯な対応に徹することができる。

つまり、元気な人々がヨリドコを中心にネットワークを広げていくことで、元気じゃない情報も自然と入ってくる。その時にヨリドコにはリンクワーカーをはじめ医療専門職者が揃っているため社会的処方や専門的な医療,介護へつなげることができる。そして、これらの効果として、将来的に認知症の発症率が低下したり医療必要度や要介護度の低下につながる

り、安心して暮らしやすい街づくりに寄与していける
のではないかと考える。

おわりに

当会は「地域を支える医療機関」をミッションに掲げ、コミュニティ活動を重視したヨリドコ小野路宿を運営している。この目的は患者を集めて医療収益にするのではなく、地域包括ケアシステムの中心にコミュニティと医療、介護が融合している場を作ることであり、このような施設が各地に設置されれば高齢化で生じている諸問題を少しずつ解決していけるのではないかと考えている。

私たちだけがヨリドコを作るのではなく、各地の医療機関が挑戦していけるような社会を願っている。

また、そのために行政による力強い支援が起きることも願っている。

以上